

保健医療情報の戦略的発信 ～市民一人ひとりの健康危機に備えて～

北多摩北部保健医療圏

実施年度	開始 平成28年度、 終了（予定） 平成29年度
背景	多摩小平保健所では、「健康で安全・安心して生活できる豊かな人生の実現」に向け、「北多摩北部保健医療圏地域保健医療推進プラン」を策定し、住民、関係団体、行政が一体となって取組を推進している。 本プランには、健康危機管理対策として、住民等に対する普及啓発・広報活動の強化が掲げられている。また、平成27年度に実施した中間評価においても、今後2年間で取り組む重点課題の一つに「双方向の情報発信による健康危機管理対策」が挙げられている。平成27年度に設置した新型インフルエンザ等圏域医療BCP検討分科会における議論の中でも、住民に対する普及啓発が課題とされている。 当保健所で、これまで取り組んだ普及啓発におけるアンケート結果等においても、平常時には市民が身近に感じない健康危機については、従来の情報発信のみでは十分な効果が得られないことがわかってきた。これは、情報の発信者と受け手に、健康危機に関する知識量や意識レベルにギャップがあることによると考えられる。 そこで、平成28年度からの課題別推進プランでは、主に子育て世代の母親たちを対象に、新型インフルエンザ対策を題材にした調査を実施し、情報の受け手側に立った発信手法の検討を試みることにした。
目標	○関係機関、事業者、市民それぞれが、新型インフルエンザが発生した際の自分の行動をイメージできる。 ○情報の受け手側に立った効果的な発信手法を検討し、他の健康危機や保健医療の各種事業にも活用を図る。
事業内容	新型インフルエンザについて、事業者や市民が正しい知識を習得し、発生時に適切な行動がとれるよう、情報の受け手側に立った発信手法を検討する。 【平成28年度】 市民活動のリサーチ、先駆的取組事例の収集、子育てひろば利用者及びスタッフに対するインタビュー調査 【平成29年度】 新型インフルエンザ対策に関する普及啓発の実施、感染症予防策及び保健所広報活動等に関するアンケート調査の実施
評価	平成28年度に実施した調査結果を踏まえ、平成29年度は、新型インフルエンザに関する普及啓発用のリーフレットを作成・配布し、アンケート調査を実施した。 「手洗い」「咳エチケット」などの感染予防策は良く知られており、認知度が高い人ほど普段から手洗い等を実践していることがわかった。しかしながら、新型インフルエンザ発生時の対応（電話相談）については認知度が低く、今後も継続的な普及啓発が必要であることがわかった。 インターネットやスマホの利用が増えているが、ポスターやチラシ、広報誌など従来型の広報を求める意見もあり、広報の内容や対象者に応じて、多様な広報手段を組み合わせる必要がある。 今後は、保健所の取組や活動内容を広く周知するため、広報誌の配布先の見直しや、ホームページの内容充実、圏域各市と連携した広報活動に努めていく。
問い合わせ先	多摩小平保健所 企画調整課 企画調整担当 電話 042-450-3111 ファクシミリ 042-450-3261 E-mail S0000351@section.metro.tokyo.jp

保健医療情報の戦略的発信

～市民一人ひとりの健康危機に備えて～

1 事業背景

北多摩北部保健医療圏地域保健医療推進プランでは、①たばこの害をなくす、②こころの健康づくりをすすめる、③新型インフルエンザに備える、④食品の安全を確保する、⑤子供の急なケガや病気にあわてない の5項目を設定し、住民、関係機関・団体等に健康の維持・向上に向けた取組を促してきた。

多摩小平保健所では、この5項目について、平成25年度から27年度までの3年間で、職員自らが製作した動画の配信など新たな手法も取り入れながら普及啓発に取り組んできた。

これまでの普及啓発に合わせて実施したアンケートでは、平常時には市民が身近に感じない健康危機については、従来の情報発信のみでは十分な効果が得られないことがわかってきた。これは、情報の発信者と受け手に、健康危機に関する知識量や意識レベルにギャップがあることによるものと考えられる。

そこで、平成28年度からの課題別推進プランでは、主に子育て世代の母親たちを対象に新型インフルエンザ対策を題材にした普及啓発と調査を実施し、情報の受け手側に立った発信手法の検討を試みることにした。

2 事業目標

○関係機関、事業者、市民が、新型インフルエンザが発生した際の自分の行動をイメージできる。

○情報の受け手側に立った効果的な発信手法を検討し、他の健康危機や保健医療の各種事業にも活用を図る。

3 平成28年度の取組

圏域5市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）にある子育てひろばを運営しているNPO法人とひろばを利用している子育て世代の母親たちを対象に、新型インフルエンザについてグループインタビューを実施した。

(1) 実施期間：平成29年2月7日～3月3日

(2) 調査対象：就学前の子供を連れて、ひろばに遊びに来ている母親（13グループ、37人）
子育てひろばを運営している団体のスタッフ

(3) 調査内容：「新型インフルエンザの発生段階と対処方法」※について説明した後、理解度（Q1）、普段の情報収集方法（Q2）、効果的な伝達方法（Q3）、伝える言葉や伝え方（Q4）等について意見を聴取

※【新型インフルエンザの発生段階と対処方法】

新型インフルエンザ発生後の対策は、発生段階で以下の2つに大別され、対応が異なる。

① 海外発生期から都内発生早期まで

発熱や咳などインフルエンザが疑われる症状が出た場合、直接、一般医療機関を受診せず、必ず「新型インフルエンザ相談センター」に電話し、相談センターの指示や助言に従い、専門外来を受診する。

② 都内感染期

新型インフルエンザの診療を特別な医療提供体制ではなく、全ての医療機関が診療を行う。

(4-1) 子育てひろば利用者へのインタビュー結果

Q1 「新型インフルエンザの発生段階と対処方法」の理解と疑問

・自分とどう関係するのかわからず、なかなかピンとこない。

- ・普通の風邪と季節性インフルエンザ、新型インフルエンザの違いがわからない。

Q2 普段、どのような方法で情報を得ているか

- ・インターネットによるSNSやメールは使う人もいたが、ゆっくり見る時間がとれないため「全く使わない」「ほとんど使わない」という人も多い。
- ・チラシの場合は、町内会・自治会や、医療機関、薬局等公的な場の掲示を見ることが多い。

Q3 新型インフルエンザ発生時の対処方法を効果的に伝える方法

- ・保健所を含む行政などの公的機関から個人宛に届いた郵便物は必ず開封し、内容を確認する。
- ・子育てひろばなどで、管理者から直接声かけされたり、手渡しされることは効果があると思う。

Q4 伝える言葉や伝え方

- ・「まず何をすべきか」「どこに連絡するか」など、大切なことを端的にわかるようにした方が良い。
- ・チラシは「行政から送られてきたものはデザインに関わらず読む」人が多かったが、あえてデザインを比較してもらったと、色を使って大切なポイントをシンプルに示したものが高評価だった。

(4-2) 子育てひろばスタッフへのインタビュー結果

- ・子育てひろばの掲示板に掲出したものは比較的良く見てもらえる。大切な情報を伝える時は、ひとこと言葉を添えている。相手に直接話しをすることが一番よく伝わる。
- ・子育て中の親は不安が多いので、心情を理解し、「相談」の場として寄り添うようなやり方で声をかけることが必要である。

4 平成29年度の実践

平成28年度の実践結果において、直接の声かけや資料の手渡しに効果があるとの意見があったことを踏まえ、新型インフルエンザに関する普及啓発用のリーフレット（図1）等を作成・配布するとともにアンケートを実施し、直接の声かけの有無や伝達方法の違いによる差について調査することとした。

(1) 平成29年度調査のポイント

- ・子育てひろばでのスタッフによる声かけの有無による差の把握
- ・子育て世代の母親以外にも調査対象を拡大
- ・新型インフルエンザ等、感染症予防策についての認知度
- ・保健所広報活動の認知度

(2) 調査方法

ア 調査期間：平成30年2月9日～3月23日

イ 調査対象：28年度調査対象の子育てひろば利用者（5か所）（以下「子育てひろば」という。）
 その他の子育てひろば利用者（33か所）（以下「その他のひろば」という。）
 市保健センター来所者（5か所）（以下「保健センター」という。）
 健康づくり推進員（以下「健康推進員」という。）

ウ 配布資料：①新型インフルエンザに関するリーフレット

②保健所広報誌（あなたにおくる健康情報 No. 41（平成29年11月号））

③アンケート調査票

④返信用封筒

（上記①～④を透明のクリアファイルにセットして配布した。子育てひろばでは、スタッフが声かけして資料を手渡しし、リーフレットの内容について簡単な説明を行った。その他の場所では、資料を自由に持ち帰る方式とした。）

エ 調査内容：新型インフルエンザ感染予防策の認知度、手洗いの実践、咳エチケットの実践、リーフレットの理解度、発生時対応（電話相談）の認知度、保健所への期待、保健所広報（広報誌、ホームページ）の認知度、活用すべき広報手段

図1 新型インフルエンザに関するリーフレット

新型インフルエンザの発生に備えて

新型インフルエンザの特徴

新型インフルエンザとは、動物（特に鳥類）同士で感染するインフルエンザ（鳥インフルエンザ）のウイルス等が人や豚の体内で変異し、新たに人から人へ効率よく感染するようになったものです。毎年流行を繰り返す季節性のインフルエンザと違い、大多数の人は新型インフルエンザのウイルスに対する免疫を持っていないため、世界的大流行（パンデミック）する可能性があります。

鳥インフルエンザと新型インフルエンザの発生フェーズ解説

1. 人への感染が可能なウイルスの発生
2. 人への感染が可能なウイルスの伝播
3. 鳥インフルエンザの人への感染
4. 感染した人から人への感染
5. 人から人への感染
6. 感染が拡大する

新型インフルエンザウイルスの感染経路（咳、くしゃみには要注意！）

新型インフルエンザウイルスの感染経路も季節性インフルエンザウイルスと同じで飛沫感染、接触感染と考えられます。飛沫感染とは、感染した人の咳やくしゃみのしぶき（飛沫）に含まれるウイルスを吸いこむことです。接触感染とは、ウイルスが付着した手で口や鼻に触れることにより、間接的にウイルスに接することを行います。

基本的な感染予防策が重要！（手洗い、マスク着用等の咳エチケットを心がけましょう）

新型インフルエンザの感染予防のため、季節性インフルエンザと同様に、手洗い、マスク着用等の咳エチケット、人混みを避けるといった基本的な感染予防策を心がけましょう。

正しい手洗いの方法

手洗いのチェックポイント

- ☐ 爪は短く切っていますか？
- ☐ 指先や爪の周り
- ☐ 時計や指輪を外していますか？
- ☐ 親指の周り
- ☐ 手首
- ☐ 手のしわ

汚れが残りやすいところ

- ① 流水でよく手をぬらした後、石けんをつけ、手のひらをよくこすります。
- ② 手の甲を伸ばすようにこすります。
- ③ 指先・爪の間を念入りにこすります。
- ④ 指の間を洗います。
- ⑤ 親指と手のひらをねじり洗います。
- ⑥ 手首も忘れずに洗います。

①～⑥で30秒が目安です。その後、十分に水で流しペーパータオルや清潔なタオルでよく拭き取って乾かします。

新型インフルエンザ発生時の医療機関の受診方法

早めの受診を心がけて下さい！
もし、急に38℃以上の発熱や、咳・喉の痛み、全身の倦怠感などインフルエンザが疑われる症状がでたら、早めに医療機関を受診しましょう。

直接かかりつけ医を受診せず、必ず事前に電話相談を！
新型インフルエンザが発生したときに設置される24時間対応の「**新型インフルエンザ相談センター**」に電話をしてください（常設ではありません）。相談内容に応じて適切な医療機関等を案内します。相談センターの電話番号は、発生後速やかに都や区市町村のホームページ等でお知らせします。

受診時にはマスクを着用して下さい！
受診の際は、他の患者への感染を防ぐため、必ずマスクを着用し、咳エチケットを守りましょう。

東京都多摩小平保健所 電話 042-450-3111
検索 多摩小平保健所
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/tamakodaira/>

患部で情報発信中！
PC・スマホで検索してね！

受診する前に電話して！ めざせ！手洗いマスター
新型インフルエンザが発生したら あらうきぎと手を洗おう！

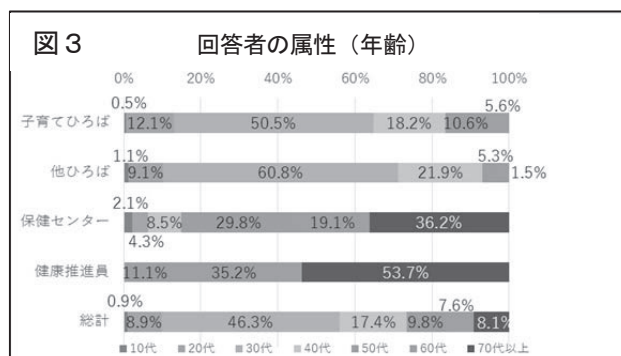
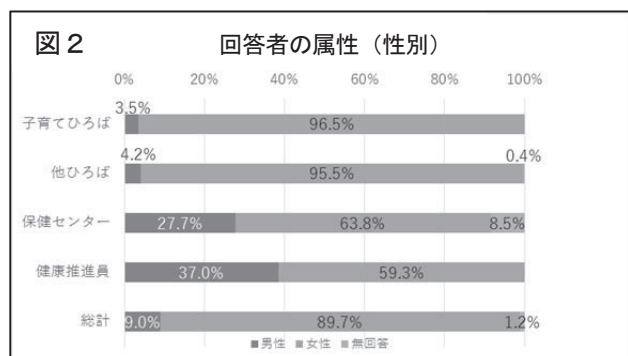
(3) 調査結果

ア アンケート調査票回収状況（郵送回答）

配布先	子育てひろば (5 か所)	その他のひろば (33 か所)	保健センター (5 か所)	健康推進員	合 計
配布数 (A)	342	933	156	165	1,596
回収数 (B)	198	265	47	54	564
回収率 (B/A)	57.9%	28.4%	30.1%	32.7%	35.3%

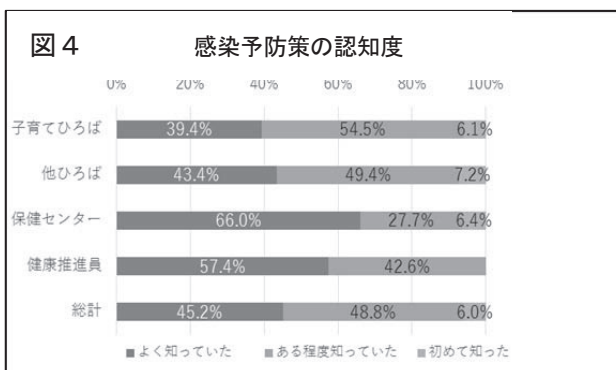
イ アンケート回答者の属性（性別、年齢）（図2、図3）

- ・性別は、女性が89.7%と多く、「子育てひろば」「その他のひろば」は95%以上が女性である。
- ・年齢層は、全体では30代が46.3%と最も多く、次いで40代の17.4%と続く。
- ・「子育てひろば」「その他ひろば」は30代が多く、健康推進員は70代以上が53.7%を占める。



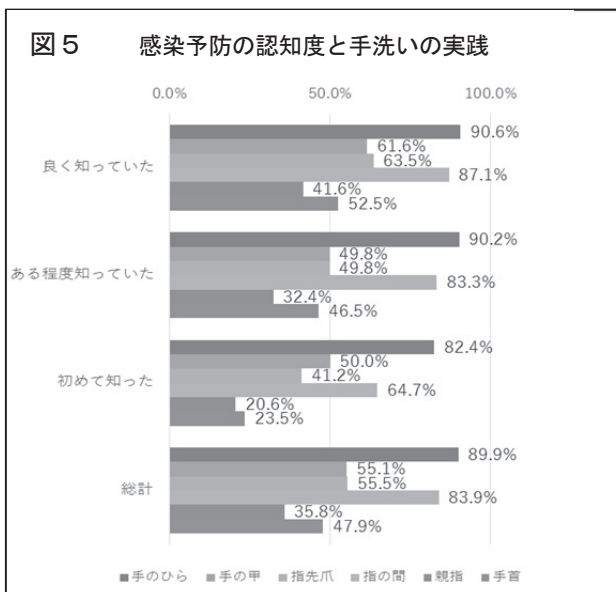
ウ 基本的な感染予防策の認知度（図4）

- ・新型インフルエンザの感染予防には、「手洗い」「咳エチケット」など基本的な感染予防策が有効であることを「よく知っていた」人は45.2%、「ある程度知っていた」人は48.8%である。
- ・「保健センター」「健康推進員」は、「子育てひろば」「その他のひろば」よりも認知度が高い。



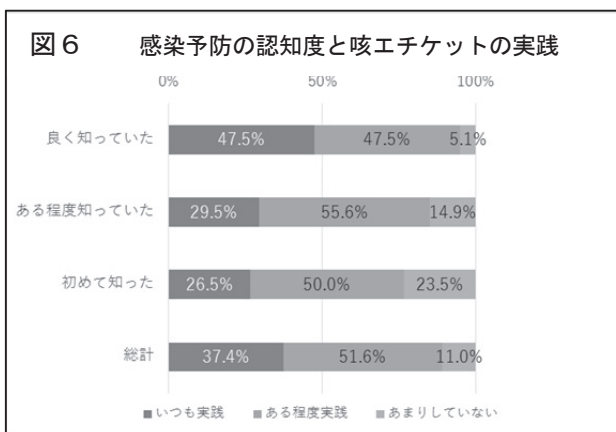
エ 手洗いの実践（図5）

- ・「手のひら」「指の間の手洗い」は80%以上の人が実践している。
 - ・新型インフルエンザの感染予防策の認知度が高いほど手洗いの実践項目数が多い。
- 【手洗いの実践項目数（一人当たり平均）】
- よく知っていた 3.97 項目／6 項目
 - ある程度知っていた 3.52 項目／6 項目
 - 初めて知った 2.82 項目／6 項目



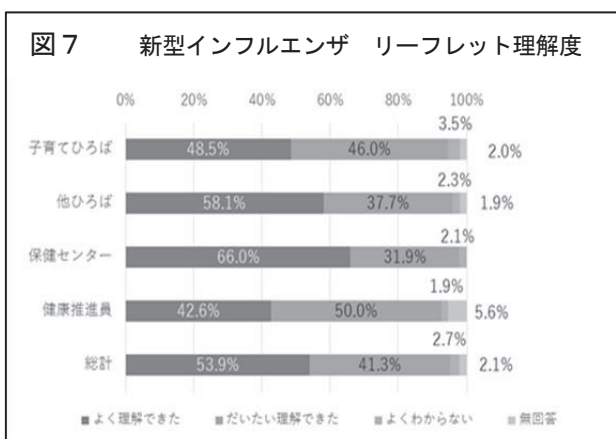
オ 咳エチケットの実践（図6）

- ・「いつも実践」「ある程度実践」を合わせると89.0%の人が何らかの実践をしている。
- ・新型インフルエンザの感染予防策を「よく知っていた」人の約半数（47.5%）が、いつも咳エチケットを実践している。



カ 新型インフルエンザに関するリーフレットの理解度（図7）

- ・「よく理解できた」「だいたい理解できた」を合わせると95.2%の人が理解できたと回答している。
- ・「保健センター」は「よく理解できた」人の割合が多い。



キ 新型インフルエンザ発生時の対応（電話相談）に関する認知度（図8）

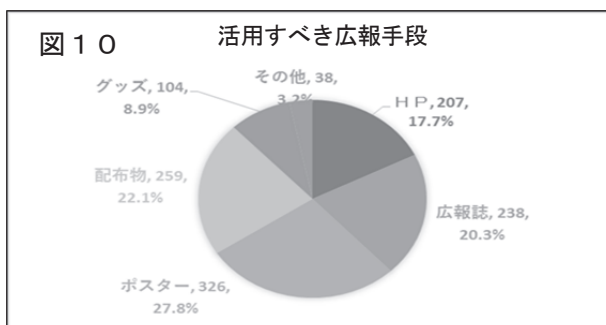
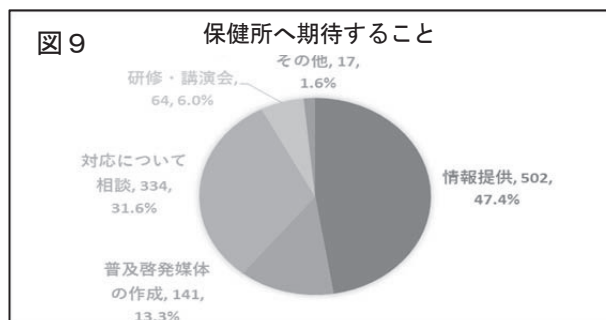
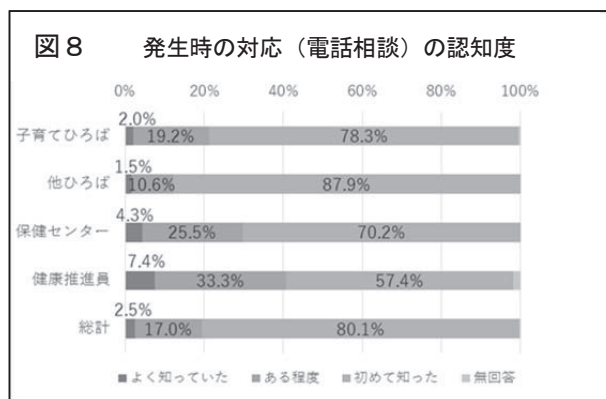
- ・「初めて知った」という人が80%以上である。
- ・「よく知っていた」「ある程度知っていた」人は、「健康推進員」が最も多く、次いで「保健センター」となっている。

ク 新型インフルエンザ対策として保健所に期待すること（図9）

- ・保健所への期待は「情報提供」が最も多く、次いで「発生時の対応についての相談」となっている。
- ・自由意見として、「わかりやすい、正しい情報提供」や「タイムリーな情報提供」を求める意見があった。

ケ 保健所が情報発信する際に活用すべき広報手段（図10）

- ・活用すべき広報手段としては、「ポスター」が最も多く、次いで「チラシ、リーフレット等の配布物」「広報誌」「ホームページ」の順となっている。
- ・自由意見として、「市報の活用」「市のホームページとのリンク」「SNSの活用」「イベント等で直接伝える」などの意見があった。



5 まとめ

(1) 調査結果の考察

- ・「手洗い」「咳エチケット」などの感染予防策の有効性について約半数の人がよく認知しており、認知度が高い人ほど「手洗い」「咳エチケット」を実践している。しかしながら、新型インフルエンザ発生時の対応（電話相談）については、これまで周知を図ってきたにもかかわらず認知度が低い状況であった。今後も引き続き、継続的な普及啓発が必要である。
- ・子育てひろばでの声かけの有無による違いは、今回のアンケート調査では明確な差は出なかった。スタッフによる声かけと説明で興味がわき、かえって疑問が生じたことも推測される。
- ・保健所へ期待することは「情報提供」が最も多く、活用すべき広報手段は「ポスター」「チラシ・リーフレット」「広報誌」「ホームページ」の順であるが、普段利用しているメディアによって意見が分かれる。

(2) 今後の取組

- ・インターネットやスマホの利用者が増えているが、ポスターやチラシ、広報誌などの従来型の広報を求める意見も多い。広報の内容や対象者に応じて、多様な広報手段を組み合わせることで普及啓発を行う。
- ・保健所広報誌及びホームページの認知度を向上させるため、広報誌の配布先見直しやホームページの内容充実、周知を図る。
- ・保健所の取組や活動内容が地域住民に十分届くよう、市報の活用や市のホームページとのリンク等、圏域各市と連携した広報活動を心がける。